

ポリーニプロジェクト 第6夜

2002 年 11 月 6 日(水) 7時 サントリーホールにて

日本初のポリーニの室内楽コンサートということだった。前半部はアンサンブル・ウィーン＝ベルリン(木管五重奏)との共演、後半はアッカルド弦楽四重奏団との共演で、いずれの共演者も名手揃いといってよかった。

ここでは、ポリーニの共演したモーツァルトのピアノと管楽のための五重奏曲(K452)と、ピアノ四重奏曲第1番ト短調(K478)について、強く印象に残っているエッセンスだけを記すことにする。まず、K452 について。これはどちらかというと管楽器の方が聴かせ場が多いと思われる。ポリーニもどちらかというと、伴奏に徹している場面の方が多かったと思った。演奏をするアンサンブル・ウィーン＝ベルリンはウィーンやベルリンの一流オーケストラで主席を務める(務めた)人たちの集団である。技術的には文句なしである。そして、各人もそれぞれ熱意のある演奏をしていることが伝わってきた。ポリーニもピアノの出番というところでは、すかさず打って出て、ピアノの存在をアピールしていた。ポリーニの音も、モーツァルトに適した、粒のそろったきれいな音で好感が持てた。まさしく優秀な演奏だったと思う。しかし、あまりにも整然とし過ぎていて、感動、といった感情からは少し離れた演奏だったように感じた。端正なモーツァルトの演奏、というのがイメージとして残った。

それに対して、K478 はまるで違った。ポリーニはこの曲に関しては、伴奏に回っていなかった。自らが主役(自らも主役の一人、とした方がいいかしら)ということをはじめからアピールするような弾き方だった。これは何かが始まる、短調の出だしながらも何か予感させてくれるものがあつた。曲が進行するにつれて、予感は当たったことを確信した。弦楽器とピアノとのコントラストは見事なまでにはっきりしていた。アンダンテ楽章も、ポリーニはしっかり聴かせてくれた。しかもきわめてモーツァルトにふさわしい演奏と思った。つまり、音がきれいで、形式美を保って感情に溺れることなく、それでいて切ないような、余情的なものを十分に聴かせてくれた。第3楽章、ロンド楽章はまさしく室内楽の醍醐味を味わい尽くすことができた圧巻だった。冒頭からして、ポリーニは独自の修飾音をつけていたのではないかしら。とにかくのりに乗っていた。この楽章は、アッカルドのバイオリンと、ポリーニのピアノとが文字通り“競奏”していた(より正直な感想としてはむしろ“競争”と形容すべきものであつた)。協奏ではない、と感じた。お互いに、対峙しあい、丁々発止とやりあっていた。まるで、各人がそれぞれ自分の出番を肘で押しのけあって主張しているかのような、そんな熱気がひしひしと伝わってきた。決して前曲でも本気を出してなかったわけではないだろうが、敢えて、「ポリーニが本気を出した」と感じさせてくれたと言いたい。これを最後にアンコールで聴けて、とても嬉しかった。もう一度演奏者たちと興奮を味わうことができたのだから。

冷静になってから考えてみた。K452 と K478 の違いはなぜ生じたのだろうか。ポリーニはじめ、演奏者の曲の解釈がこのような違いを生んだのだろうか。それとも、共演者との相性のようなものがこのような違いを生んだのだろうか。私は印象として後者の線が強いのではないかと感じた。

11 月 24 日記 寺内 かえで